

令和3年度 第7回松本市地域づくり市民委員会 会議要旨

開催日時 令和3年8月20日（金曜日） 午後1時30分から午後3時00分まで

開催場所 大手公民館 2階大会議室

出席者（敬称略）

委員 降旗都子（委員長）、丸山宗志（副委員長）、内山博行、倉田美智子、臼井和夫、山下京子、赤羽 勝、鳥羽弘幸、倉澤 聡、窪田隆彦、相原功子、小林 修、松山紘子、久保 愛
（欠席：濱由佳子、林下すず子）

事務局 地域づくり課 住民自治局長 村山 修 地域づくり課長 廣田圭男
市民活動・ユースサポート担当係長 胡桃澤伸一
地域づくり担当係長 床尾拓哉、主査 内田裕美

1 開会

（降旗委員長）

2 あいさつ

（降旗委員長）

- ・ コロナの感染者が増えている中ではあるが、皆さんのご意見をお伺いしないと進められないため、開催させていただいた。7月末に提出いただいたレポートは、正副委員長及び倉澤委員、鳥羽委員でしっかり読み合わせを行い提言書骨子(案)としてまとめた。

3 第6回会議録の確認について

（降旗委員長）

- ・ 第6回議事録と合わせて次回確認する。

4 会議事項

(1) 第5期地域づくり市民委員会提言書骨子(案)について （事務局）

資料説明

- ・ 骨子(案)を2章ごと区切り読み合わせ、意見を募った。

（降旗委員長）

意見交換

- ・ 別紙「提言書骨子(案)についての協議内容」を参照

(2) 今後の進め方

- ・ 別添資料「地域づくり市民委員会提言書骨子(案)」に出された意見を反映させ、骨子を作成。
- ・ 骨子の送付と同時に提言書(案)の作成に取り掛かる。
- ・ 提言書(案)の作成は正副委員長、グループリーダーの倉澤委員と鳥羽委員に一任

5 今後のスケジュールについて
(事務局)

※ 資料に基づき説明

<質疑等>

- ・ なし

(以上)

提言書骨子(案) 協議内容 (要約)

1 協議結果

(1) 「はじめに」について

No.	発言者	発言要旨
1	小林委員	提言書は読んで力になる、読んで夢を与えられる、読んでこれからの地域社会が良くなっていくことが感覚としてわかるような提言書にして欲しい。
2	倉澤委員	地域課題の現状は大変重要なので書き方に工夫が必要 住民自治ということを、ある程度人に伝えられる表現にした方がよい。
3	鳥羽委員	地域の現状を「地域の繋がりが失われて」と言い切るのではなく、薄くなっているなどとしたらどうか。

(2) 「提言1 幅広い住民の地域参加と居場所の創出」について

No.	発言者	発言要旨
1	倉澤委員	「敷居の低い空間を作る」では、空間だけではなく「機会」もあるのでは。
2	久保委員	「敷居の低い空間を作る」という考え方は新しく良い。 地域コミュニティではなく、第三の居場所なら活動できるといった人が増えてきている。 地縁に縛られないフリーランス的な人も、地域づくりの活動に参画できるような居場所が欲しい。居場所を作ってあげたいと思う人たちへのサポートについて触れてほしい。
3	小林委員	D Xやシビックプライドなど、馴染みがない用語がある。
4	事務局	シビックビックプライドは、ふるさとへの愛着とか誇りとかに訳されることが多い。専門用語は別の用語に置き換えるか注釈をつけるなどしたい。
5	赤羽委員	D Xを取り上げたのは、市で推進しているということもあるが、デジタル知識のある人が高齢者等に教えることで、つながるきっかけづくりとして、活用できるのではと考えたから。
6	倉澤委員	デジタル技術の活用は手段。手段を目的化しないように手段であることをはっきりと表現したほうがよい。
7	降旗委員長	デジタル技術にあまり長けていない世代に、中学生が（例えばスマホの使い方を）教えるという試みがされている。 実際に新しいつながりが生まれているので、デジタル技術を介してつながるということを意識して表現したい。

8	小林委員	高齢者は携帯電話・PC等デジタル機器は持っているが、活用となると拒否感があり、その世代にDXという言葉は怖さがある。せめてSNSの活用やリモート飲み会をしてみようくらいのわかりやすい表現でとどめたらどうか。
9	鳥羽委員	提言書の中に、少子高齢化という世の中の動きを入れた上で、デジタルを利用した新たな地域づくりという項目にしたらどうか。 高齢者がDXで何をするのか、高齢者を意識した表現がほしい。
10	降旗委員長	どの年代も誰も取りこぼすことなく、住みやすい街をつくるのが地域づくりだということを念頭に置きながら、提言書に反映させていきたい。

(3) 「提言2 地域の「学び」に対する支援」について

No.	発言者	発言要旨
1	小林委員	コミュニティスクールに期待している。コミュニティスクールは地域も子どもも育てるというニュアンスが欲しい。
2	降旗委員長	学習指導要領が変わり学校側にも戸惑いがある。赴任してきた先生たちに地域を知ってもらうことは大事。 地域と先生とが一緒に考え、子どもたちのために何ができるか同じ目線で考えていくことがとても重要。
3	降旗委員長	提言書の中で、これまでの形や言葉だけの「コミュニティスクール」ではなく、どうすれば地域を知ってもらうことができるのか触れたい。
4	内山委員	寿台・松原・内田の3地区と明善中学校との取り組みが成功している。地区公民館が事務局を輪番で行い、地区に住む中学生たちと町会が協働している。 子どもたちは地域の一員だと本人も周囲も理解している。
5	小林委員	カリスマファシリテーターを連れてきて、楽しめるワークショップを開くことで、それぞれの地域で住民が地域課題に前向きに取り組めるような学びがあれば良い。

(4) 「提言3 地域課題の主体的な検討への支援」及び「提言4 隣近所の顔の見える関係づくりの推進」について

No.	発言者	発言要旨
1	内山委員	町内公民館と地区公民館の表現は明確に使い分けてほしい。
2	内山委員	「地域の意思を反映する自治の拠点としての」公民館、とあるが、「生涯教育の拠点」という性格についても触れてほしい。
3	窪田委員	生涯教育と拠点としての地区公民館や町内公民館の活用事例は、新

		しい公民館の手引きに掲載しているので参考にしてほしい。
4	事務局	骨子案では、センター権限強化について触れているので、自治の拠点という部分が前面が出ている。 提言書として肉付けする際には、生涯学習の機能についても触れたい。
5	倉澤委員	課題解決に取り組んでいるが、取り組みが十分でない、目指すところにまだ足りていないといった地域の現状について書いたらどうか。 課題＝解くべき課題と表記したらどうか。解ける課題・問題については事例を出して紹介してはどうか。
6	内山委員	提言3のタイトルを見ずに(1)(2)を見ると、住民主体の表現がない。 地域づくりの基本はすべて住民。あるいは町内会・自治会というような表現が必要。明記しないと住民自治というものが薄れてしまう。
7	内山委員	「地域づくりセンター」としている箇所を「地域づくりセンター長」とすれば、職員の養成に対する提言になるのではないか。
8	降旗委員長	地域に関わる職員が、いかに地域のことを考え、地域のために住民と一緒に動こうとしているかが重要。一緒に働くために地域のことを知るのはもちろん、地域が積み重ねてきたものを知ってほしい。 誰が上とか下とかでなく、同じ目線で一緒に汗をかき、地域を知るという学びが職員に必要なと思う。
9	倉澤委員	センターをセンター長と書いてしまうと、公民館や福祉ひろばといった組織に対する関係があいまいになってしまう。 公民館は教育委員会に属しており、あいまいな表現によって独立性が失われかねないので注意が必要。
10	窪田委員	城北地区では非常によく連携が取れている。住みよいまちづくりを掲げて、町会長・公民館長・センター長など月一回集まり意見交換し、連携を密にしている。
11	山下委員	センターの権限強化に関する記述について、「自治の拠点、生涯学習の拠点としての公民館、福祉の公民館としての福祉ひろばの特色を活かして地域づくりセンターがまとめていく。」といった表現にしたらどうか。
12	降旗委員長	地域によって特色があり、それを生かしながら、センター長、公民館長、主事とか福祉ひろばコーディネーター、生活支援員、皆一つの方向に向かって協力できる体制が住民にとって望まれること。
13	内山委員	地区公民館は35地区すべてにあるが、町内公民館はすべての町会にはないので表現に工夫が必要。

14	久保委員	<p>支える、支えられるという言葉よりは、協働してという表現にしたらどうか。縦よりも横に協働することが望ましい。</p> <p>カリスマリーダーが存在すれば物事は進むが、存在しなくなった時にも、協働さえできていれば、ごく普通の住民だけで、乗り越えることができる。</p>
----	------	---